

メッセージアウトライン

ローマ10：1～13「主の御名を呼び求める者」

[1]「兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです」

9章に続きパウロはイスラエルの救いを熱望しつつ、彼らの問題点を指摘していく。

[2-4]「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。」

彼らは律法の儀式と行いに熱心であったが、その熱心は知識に基づくものではなかった。彼らは神の義を知らず、自分の義を立てようとした。「神の義」…神の本質であるとともに人間を義とする神の働き。「自分自身の義」…自分を正しいとすること。しかし、キリストが律法を終わらせ、律法による行いではなく、ご自身の十字架の贖いによる完全な救いをもたらしてくださったので、信じる人はみな義と認められるのである。

→ガラテヤ3:19~25

[5]「モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いています」

これはレビ18:5の引用であり、律法のすべての戒め、規定を完全に守り行うことができた者は、それによって救われるということ。しかし、問題はそれを完全に守り行えるような人はいないということである。

[6-7]パウロはここで申命記30:12~13を引用してユダヤ人の自力救済主義の思い上がりを指摘している。キリストはすでに天から下って十字架にかかり、死なれ、葬られ、死より復活して天に上られたのだから、自分の力に頼って、天に上ろうとしたり、地の奥底に下ろうとする必要はない。それはキリストの贖いを冒瀆することになる。

[8-10]8節は申命記30:14の引用であり、近くにあり、口にあり、心にあるみことばとは「私たちの宣べ伝えている信仰のことば」つまり福音のことばであるとわかる。福音のメッセージはだれの手にも届く身近な現実の中において説かれており、それは信仰によって誰でも到達できる。9節では口で告白することと、心で信じるということ、この二つが結び合わされて信仰告白の行為が美しく表現されている。10節では内面の信仰は必ず外面の告白をともし表裏一体のものであることを教えている。

[11]「彼に信頼する者は、失望させられることがない」。これはイザヤ28:16からの引用であり、イエス・キリストを信じる信仰の確実性が強調されている。

[12-13]主イエスを信じる者はすべて救われ、決して失望させられない。もはやユダヤ人と異邦人との区別はない。「同じ主がすべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して、恵み深くあられるから」である。13節の「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」はヨエル2:32からの引用。これこそ信仰者、教会の信仰告白である。